

「自然」の中の「人」

当立石科学技術振興財団は設立以来一貫して「人間と機械の調和」を標榜してきた。「人」と「人」の間、コミュニケーションまで含む「人間」に主眼をおくすぐれた趣意である。一方、「人」は自然や社会など様々な環境の中で生活しており、古くからこれら環境に適応・順応してきた。

かたや「西洋が自然を征服してきたのに対して東洋は自然を尊重してきた」との議論もあるが、それは危険である。それどころか、東洋でも近年の環境破壊はとて「自然を尊重してきた」とは言い難い。

また、近年「自然を大切に」「地球にやさしく」などとよく見聞きするが、これらに対して私は違和感を覚える。なぜなら、そこには「自然」・「地球」は「人間」との対立概念で、「人間」の方が偉いがゆえに「地球」や「自然」を保護すべきである、との思い上がりを感じられるからで、その遠因は西洋では旧約聖書創世記第1章にまで遡るように思える。そこには「(神は) …我々に似せて、人を作り、…地上のすべてのものを支配させよう (26節)」とある。明らかに人間上位・人間中心・人間至上の思想で、これが humanism の第一義でもある。

翻って、仏教では「じねん」という言葉があり「自然」と書く。明治初期 nature の訳語にこの「自然 (読みは“しぜん”)」を当てたとされるが、両者の意味合いはかなり違う。「じねん」は「自ずから然る、あるがままに」ということ。人間を含めて生きとし生けるものはすべてこの大きな「じねん」の中に含まれる。

話を「地球にやさしく」に戻す。極論として、仮に人類が滅亡しても地球自身は却って清々したとばかりに悠然と太陽の周りを回り続けるであろう。地球が大切なのは「人類が地上で住まわせてもらう」ためであって地球のためではない。

当財団は「人間と機械」について大きな第一歩を踏み出した。次は世界に先駆けて、視野を、地球、宇宙の総ての存在に感謝し自然の中で生かさせてもらう「人」に広げるのも有意義かと思われる。それは全く新しい思想へのチャレンジであろう。願わくば自然や四季を愛でて1,200年の歴史を持つ京の地から新しいパラダイムが誕生することを願いたい。そのココロの支えのキーワードには京都ではごく普通の「おおきに」「すんまへん」などがふさわしいように思える。的を射た言葉である。

